

## チーム医療の基盤を築く全寮制初年次教育

倉田 知光

(昭和大学 富士吉田教育部 教育推進室長)

### 初年次全寮制教育の目的

昭和大学は昭和四〇年以来、初年次教育に全寮制を取り入れてきた。富士山麓の豊かな自然の中、医学部、歯学部、薬学部、保健医療学部の四学部六学科の学生六〇〇名が寝食を共にし、共に学び、遊び、語り、切磋琢磨しながら友情を深め、医療人として必要な学力と共に豊かな人間性を育むことを目的としている。

全寮制教育は、本学の建学の精神である「至誠一貫」の患者にやさしく、真心のこもった高度な最新医療を提供する事の出来る医療人を育成するためには極めて有用であり、

全寮制なしに本学はあり得ないといっても過言ではない。本学の全寮制教育は、医療人に最も必要とされる豊かな人間性を構築し、共に学び、支えあい、常に相手を思いやる博愛、奉仕の精神を育む六年間あるいは四年間の一貫教育の中での初年次教育に非常に重要な役割を果たしている。

富士吉田教育部は、教育寮としての寮がキャンパス内に五棟あり、うち三棟は男子寮、二棟が女子寮である。学部、学科の異なる学生が四人一部屋で共同生活を行い、それぞれの将来の職業、役割を入学直後から共に考え、一年間を通してお互いを理解しあい、自らの職に与えられる責任、任務を生活の中からも認識し、将来チーム医療を行うため

の能力、視野、人間性を育み、医療人としての自覚を促すことを目的としている。また、寮以外の施設として、講義棟、実習棟、図書館などの教育施設に加え、体育館、温水プール、グラウンド、野球場、ラグビー場、テニスコート、馬場など多くの運動施設を整備している。医療人に求められる協調性、精神力、豊かな人間性、広い視野、柔軟な思考は勉学のみで達成できるものではない。日常生活の中で常に自らの健康管理、体力の維持・増強を意識する態度の修得も全寮制教育の重要な目的の一つである。

### 昭和大学における初年次教育

医療人育成に対して、最も重要な時期は入学直後の導入教育であると本学では考えている。

初年次教育の重要性は、単に学力の増強、専門知識の修得といった知識の修得というのではなく、それぞれの職種を指す学生の意識、態度教育の最も重要な期間であるということである。この考えは、医療人教育に限ったことではなく、全ての領域に共通して言えることと考える。

医療系を目指す学生は特にそうであろうが、大学入試のために、高校三年間、場合によっては中学からの六年間を受

験勉強のみで過ごし、本来持っていた医療人になってからの目的が薄れ、合格することが目的となってしまっている学生が近年多く見られる。また、激しい受験競争を乗り切り、合格という勝利を手にするために、本来の学ぶ目的が、単に記憶する、あるいは、正解のみを求める学習形態になり、得た知識を基に発展させる思考が欠如してしまっている学生が増えている。悲しいことに「学ぶことは覚えること」となってしまう、「知識は与えられるもの」になっている。学生に質問すると「習っていないから解りません」という答えが返ってくるようになって、随分長い時間がたっているように思う。また、疑問に思うことについて、「教えてください」という質問形態も増えてきている。我々の学生時代にはどうだったんだろう？ と、ふと考えさせられてしまう瞬間がある。本来、大学とは「自ら学ぶ」場所ではなかったのだろうか？ 自分で問題を見つけて、その解答を自分で導き出す場所ではなかったのだろうか？

このような漠然とした疑問の中、昭和大学では学生の本来持つべき能力、技術の復古、急速に進歩する医療の現場や日々進歩する医療環境で発生する膨大な情報に対応し、医療人となった後に最先端の医療を継続して提供するための能力を早期から修得するために、全寮制の環境、医系総

合大学である本学の特徴を最大限に活かした学習法の導入を検討した。

### 学部横断問題基盤型学習法の導入

本学では、「医療人教育における問題解決型、自己主導型学習法の重要性と将来のチーム医療を担う学生の教育を考える際に最適な学習方略はPBLチュートリアルである」という方針のもと、平成一六年度より全学的なPBLの導入、特に学部横断型での実施が検討されてきた。平成一八年度には文部科学省「地域医療等社会的ニーズに対応した質の高い医療人養成推進プログラム」において薬学部の「チーム医療の有用性を実感する参加型学習」の事業計画が採択され、これを機に平成一九年度より一年次教育にPBLチュートリアルを導入した。

富士吉田教育部におけるPBLチュートリアル教育の特徴は、初年次の教育が全寮制であるところにある。PBLチュートリアル教育は、少人数の学生グループが一名の教員（ファシリテータ）の指導の下、自ら学習すべき項目を選択し、グループでの討議を行い、疑問を解決するという学習方略である。六〇〇名の学生を八人程度のグループに

し、シナリオと称する短い文章を学生に提示する。学生がそのシナリオの中の興味ある単語、よく解らない単語などを抽出し、グループで徹底的にディスカッションを行う。興味のあるところ、不明な点を各自がそれぞれの手法で調査、学習し、その学習した内容を再度持ち寄り討議する。最終的にグループ内での学習内容についての合意を形成し、一つの学習が完結するといった方法である。この教育法には、グループが集まってディスカッションする小部屋が多数必要となる。本学では全寮制を行っている利点から、寮の一部に使用していない居室、学習室がある。この空間を文部科学省「地域医療等社会的ニーズに対応した質の高い医療人養成推進プログラム（医療人GP）」の予算で改築し、Small Group Study Center (SGSC)（写真1、2）をつくり、実施している。

PBLチュートリアル教育は、授業の一つとして行い、全てのグループに必ず一名は各学部の学生が入るようにグループングを行い、医療、健康に関する内容について四学部の学生がそれぞれの視点から討議を行い、将来チーム医療を実践する際の、さまざまな場面での問題解決のプロセス、各職種役割と連携、協調し合いながら問題解決策を提示するための態度と技能を修得することを目的として行ってい

習慣付けられてきた「教わる学習」、覚える学習」からの脱却を大学初年次に達成することが出来る。この事は、膨大な知識、技能の習得を要求される専門課程での教育に対応できる学習技能の修得に有用であり、得た知識を単なる知識にとどまらせず、得た知識を活かし、使うことが出来るようになる。また、グループで学習することにより、コミュニケーション能力の向上にも繋がり、他者の話を聞く能力と同時に伝えることが出来るようになる。

しかし、本学でのPBLチュートリアル教育は、これまで述べてきたような利点ばかりがあるわけではない。PBLチュートリアル教育、特に初年次の未熟な学生たちへの教育にはファシリテータと呼ばれる教員の木目細かな学習サポートが必要となる。ファシリテータは学生に対して知識の教授や学習内容の誘導は決して行わない。常に学生たちの学習のサポートを行う。このためのファシリテータは最低でも五〇人、延べ一五〇人近くが必要となる。富士吉田教育部の教員全てが関わってもとうてい足りる人数ではない。各学部の教員の協力が必須となる。本学の特徴である初年次全寮制教育ではあるが、その反面、専門課程の学部は富士吉田から約一〇〇キロ離れた東京都品川区（医学部、歯学部、薬学部）および神奈川県横浜市（保健医療学部）に

る（写真3）。  
 本学のPBLチュートリアル教育の大きな利点は全寮制教育の中での実施ということにある。通常の大学では、授業終了後はそれぞれの生活の場に移動をする。全寮制の本学においては、授業終了後は全員寮に戻る。すなわち、生活そのものが学習の場であるということである。授業時間中に不十分であったディスカッションも、グループ内の個々の同性学生間では、寮内で随時行える。また、各寮は異性が立ち入ることは寮則で厳しく禁止されているが、必要があれば、SGSCを門限直前まで使用することが出来る。そのほかにも食堂ラウンジや部室棟など、グループ学習に必要なスペースが寮内には多数ある。

これらの施設を学生たちはフルに活用し、これまでの中等教育の中で



写真1 SGSC内1

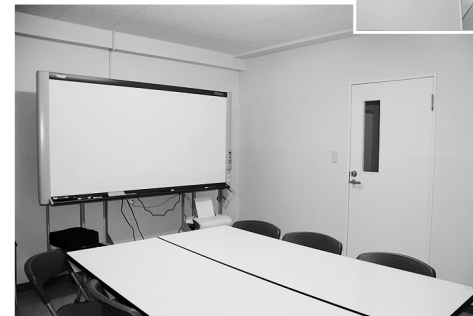


写真2 SGSC内2



写真3 PBL授業風景

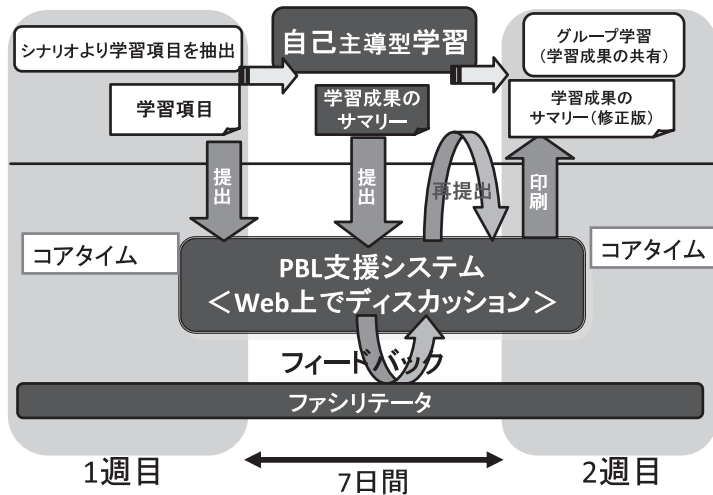


図 PBL支援システム

ある。そのため、学生に対する学習支援、特にPBLチュートリアル教育で最も重要視する授業時間終了後の自学自習の期間におけるサポートは非常に難しいものとなる。

この点を解決するために、本学のPBLチュートリアル教育では、インターネットを利用したPBLチュートリアル支援サイトを設置し、学習内容の確認、学生への指導、学生間の情報交換などグループ学習に必要なあらゆる支援を行うことで対応している(図)。この支援サイトは、現在ではPBLチュートリアル教育のみならず、他の教科、実習などにも活用されており、学部学科を越えて活用されている。

初年次に行っているPBLチュートリアル教育は、単に学習技法の修得にとどまらず、この授業を機に他の教科における学習に対して、学生たちが自主的にグループ学習を実施している。PBLチュートリアル教育のために作った施設が、教科の枠を越えて活用され、実施一年で無くてはならない施設になりつつある。

一つのきっかけが学生の学習に対する視点、姿勢を大きく変えることは今回の試みでも明らかである。昭和大学が行っている全寮制教育は、本邦では稀な教育形態と位置づ

けられている。しかし、国際的視野に立ってみると、欧米の有名校とされる大学では既に一世紀以上にわたり全寮制教育を行い、大きな成果をあげている。大学初年次教育における全寮制教育に対する国際的評価は既に下っていると言っても過言ではないと考える。本学が行っている全寮制教育に加え、最近の試みである寮の施設を最大限に活用した「自学自習」「自ら学ぶ」態度教育は決して新しい教育ではない。むしろ、この十数年間に失われてしまった本来の教育姿勢、学習姿勢を呼び戻すことに他ならないと考える。

本学では、これまでに培ってきた全寮制教育の利点を更に活かし、チーム医療の実践に貢献できる、やさしさと強さを兼ね備えた医療人の育成に全力を尽くしていきたいと考えている。